

ほんわ館だより

令和7年6月発行
第153号

中山町立図書館
開館 9:00～19:00
休館日 6/2.9.16.23.30

6月の展示コーナー

★おすすめコーナー 『ダイエット・美容』

★児童書コーナー

・絵本コーナー 『ちょっとあまやどり』 『のりものあつまれ』

・円形コーナー 『数と科学』

・空中図書コーナー 『むし』

・小学生おすすめコーナー 『宇宙』

★2階掲示板 『おもわず笑っちゃう絵本』

今月のおはなし会は6月21日
(土)11:00～11:30 多目的室で
行います

『春の本フェス』ご来館
ありがとうございました！

5/11(日)春の本フェスを開催しました



<スペシャルおはなし会>



<本の世界の料理教室Part9>



<籐を使った
ワークショップ>

ほんわ館からのお願い
梅雨の季節になりました。急に雨が降り出すことがあります。濡れた本は元に戻らないので借りた本は袋に入れましょう。

新着 最近入った本を紹介します

※ここに紹介した他にも
たくさん入っています

【児童書(えほん など)】



◀『見るだけで
世界がわかる
大図鑑』
KADOKAWA



◀『大ピンチ
ずかん 3』
鈴木のりたけ/作
小学館



◀『けんちくって
たのしい!!』
隈 研吾/監修
たつみなつこ/絵・文
KADOKAWA

【寄贈・郷土DVD】タイトル	企画・制作	【児童書】書名	編著者名
中山町川向金毘羅樽流し	同 保存会	人は見た目!?ルッキズムの呪いをとく!	矢吹 康夫/監修
【文芸書】書名	編著者名	世界をつくる数のはなし	横山 明日希/監修
ものごころ	小山田 浩子/著	正しく疑う	池上 彰/監修
署長サスペション	今野 敏/著	つかめ!!理科ダマン 9	シン テフン/作
闇をわたる	堂場 瞬一/著	ちょっとだけともだち	なかがわちひろ/作
交番相談員百目鬼巴	長岡 弘樹/著	【教養書】書名	編著者名
ああうれしい	畠中 恵/著	絵本のひみつ	余郷 裕次/著
もの語る一手	青山 美智子/著	人生は、捨て。	川原 卓巳/著
終わりなき対話	谷川 俊太郎/著	クルマの最新メカニズム	鈴木 喜生/編著
それいけ! 平安部	宮島 未奈/著	原田 マハのポスト印象派物語	原田 マハ/著
桜風堂夢ものがたり2	村山 早紀/著	ヨイヨワネ(あおむけ編・うつぶせ編)	ヨシタケシンスケ/著
山本周五郎<未収録>時代小説集成	山本 周五郎/著	フラット登山	佐々木 俊尚/著
フォース・ウィング<1, 2>	レベッカ・ヤロス/著	東大卒、じいちゃんの田んぼを継ぐ	米利休/著
最悪の相棒	伏尾 美紀/著	沖縄戦	林 博史/著



本の歳時記



— 桜桃忌（おうとうき） —

もうすぐ収穫の最盛期を迎えるサクランボは、山形県で栽培を始めて今年で150年になります。サクランボと言えば、本の世界では6月19日の「桜桃忌」でしょうか。太宰治を偲んで命名されたもので、死ぬ直前に執筆した作品が『桜桃』というタイトルだったことからそう呼ばれるようになりました。

『桜桃』（太宰治／著 日本の文学75 ほるぷ出版）

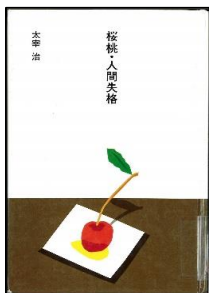
主人公には、妻と子供が三人いて4歳になる長男には障害があり、まだ言葉を発することができません。小説家としていことから、太宰自身の事を語っているのでしょうか。ある日、子供のことがきっかけで夫婦喧嘩になり、いつものように家を飛び出し飲み屋に逃げていきます。そこで出された桜桃を、子供は見たこともないかもしれないと思いつつも、不味そうに食べては種を吐き出し、子供より親が大事と呟きます。生きにくさに悩みぬいた作家の最後の作品です。

『太宰治の作り方』（田澤拓也／著 角川学芸出版）

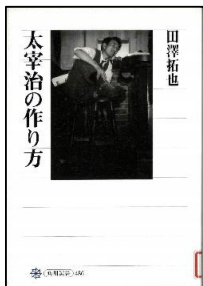
なぜ、太宰治の作品はいまだに多くの読者を惹きつけているのか？ 著者は『津軽』の冒頭の一節を倣って、太宰と同じような年齢で死んだジョン・レノンとモーツァルトの3人を天才と呼びます。しかし、モーツァルトの音楽には天上から降り注ぐような響きがあるが、太宰の小説は人間の手による仕業に思えるという。私小説とも評され「生きるのが下手な私」が繰返し描き出したのは、人間ゆえの煩惱の深さ。生誕100年を超えてなお愛されつづけるその人と作品の太宰流小説術の核心に迫ります。

『太宰治と旅する津軽』（太宰治、小松健一／著 新潮社／編 新潮社）

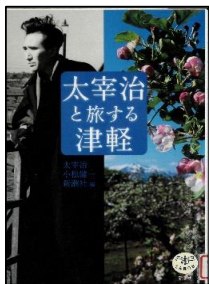
名作「津軽」は、昭和19年（1944年）の初夏の津軽路を約3週間かけて歩いたノンフィクションの風土記です。この作品を道標に、蟹田、外ヶ浜、三厩、竜飛までの津軽半島に遺された太宰の望郷の旅の足跡を、作品の一節と美しい写真とともに辿ります。また、竜飛から故郷の金木町に戻り、生家の様子や最終章で再会を果たす子守のタケが住む小泊と、岩木山を仰ぐ津軽平野を紹介しています。そして、5度に及んだ自殺・心中の現場、谷川温泉や玉川上水などを訪ね、その日その時、作家の目に映った心象風景を追っていきます。



『桜桃・人間失格』



『太宰治の作り方』

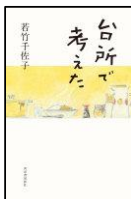


『太宰と旅する津軽』

ほんわ館で読まれています

『台所で考えた』

若竹 千佐子／著 河出書房新社



夫を亡くし63歳で主婦から作家になり、「おらおらでひとりいぐも」で芥川賞を受賞した著者。孤独と自由、自分を知る楽しさ、家族の形、ひとりて生きること…。書いて考えて辿りついた、台所目線の哲学。

『わからないので面白い』

養老 孟司／著 鵜飼 哲夫／編 中央公論新社



頭だけで考えたことの安易な正当化を「ただかか千五百グラムの脳味噌が、そうだと思っているだけ」と痛快に斬り、子どもと虫の将来を本気で心配する。“養老節”炸裂のベストエッセイ22篇。

『京屋の女房』

梶 よう子／著 潮出版社



江戸時代、マルチクリエイターとして活躍した山東京伝には、二人の妻がいた。後妻のゆりは浮世離れした夫との暮らしに戸惑い、「出来た前妻」の影に嫉妬を覚えながらも完璧な妻を目指して奮闘していく。

『月収』

原田 ひ香／著 中央公論新社



年金暮らしで月収4万円の66歳から、夫の遺産と株式投資で月収300万円ある52歳まで、それぞれの月収に見合う生活を送る6人の独身女性が織りなす、お金をテーマにした短編集。